



TITLE:

契丹語の歴史言語学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

大竹, 昌巳

CITATION:

大竹, 昌巳. 契丹語の歴史言語学的研究. 京都大学, 2020, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22174>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	大竹 昌巳
論文題目	契丹語の歴史言語学的研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、文献言語である契丹語を対象として、その文字体系の解読、音韻論的・形態論的諸特徴の解明、および当該文献を用いた漢語音の再構を試みたものである。</p> <p>契丹語は、10世紀から12世紀にかけてマンチュリア・モンゴリアおよび現在の北京を含む中国本土北部にまたがる領域に「遼（契丹）」と呼ばれる大帝国を築いた契丹人の言語であり、契丹人自らが創製した2種類の契丹文字（契丹大字・契丹小字）によって書かれた文献資料から知ることができる。本論文はこのうち契丹小字文献を主要資料として契丹語の研究を行なったものである。</p> <p>本論文は全6章と附録より構成される。</p> <p>〈第1章 序論〉は、本論文の研究目的と概要について述べたのち、本論文で使用する契丹語資料の概説を行なっている。契丹語資料としては契丹小字文献、契丹大字文献、および漢文文献中の漢字音写資料が挙げられており、そのうち本論文の主要資料である契丹小字文献については、そのほとんどを占める墓誌銘・哀冊文の一般的様式と、現在までに公刊されている各文献の基礎情報について記述している。漢字音写資料は石刻文献と伝世文献に分けて紹介されるが、伝世文献については『遼史』のような後代に編纂された歴史書の漢字音写には後代の改変が見られる可能性があることに注意を促している。</p> <p>〈第2章 文字篇：契丹小字の文字体系〉では、契丹小字の文字体系の基本的特徴の解明が試みられる。まず第1節では、契丹小字の視覚構造が記述される。論者は契丹小字に視覚的に認められる単位として字素・段・字・行・段落を認定し、それらの構成原理を記述する。すなわち、契丹小字では字素が左から右へ最大2個排列されて段が構成され、段が上から下へ排列されて字が構成され、字が上から下へ排列されて行が構成され、行が右から左へ排列されて段落が構成されるのが原則である。契丹小字がこのような構成原理を有する動機を、論者は漢字の影響や契丹語の形態的特徴によって説明している。本章では上記の排列原理の例外となる事例も紹介され、例外となる理由が検討されている。また、字素目録が提示され、368種類の字素が暫定的に認定されている。</p> <p>第2節では、契丹小字の表音原理の解明に向けて、先行研究の音価推定方法やそれによって得られた文字理解が批判的に検討される。ここでは、先行研究が個々の字素の音価を推定する際に（暗黙裡に）前提している仮定が妥当でないこと、それゆえ先行研究が主張する推定音価や文字体系の特徴も論拠を欠くことが論じられ、とりわけモ</p>			

ンゴル語との同源語や漢字音写を利用した音価推定方法の不確実性が問題視される。結論として、不確実な証拠・推論を取り除き、確実な証拠・推論のみに基づいて語形・音価推定を行なうべきだという方針が確認される。

第3節では、第2節をふまえ、実際に文字体系の“解説”が行なわれる。まず、従来行なわれてきた漢語借用語表記と漢語原音との比較分析が、従来より厳密な原理に基づいて行なわれ、その範囲で契丹小字の表音原理の特徴が推定される。また、従来有効利用されていなかった押韻資料を利用して漢語借用語表記の分析結果が修正・拡充される。ここまでの資料の分析では音価が推定可能な字素の種類は限られ、多音節語の綴字規則も明らかにされないため、論者はここで綴字における母音重複現象に着目する。20点の文献を含む電子コーパス上で字素の連接特徴を調査することで「母音重複規則」と呼ぶ綴字規則の詳細を明らかにし、その規則によって契丹小字のより多くの字素の音価推定が可能となることが論じられる。これをふまえて、実際に契丹小字の字素の音価推定作業が行なわれ、またV（母音）型字素やCV（子音＋母音）型字素の表わす母音が長母音であること、VC（母音＋子音）型字素の中にも〈長母音aa＋子音〉を表わす字素が存在することが論証される。これらの知見に基づき、論者は契丹小字がVC型字素を主体とする音節文字体系であることを論じ、また契丹小字の綴字規則がいかなるものかを整理し、そして契丹小字がなぜこのような表記特徴をもつのかを契丹語の音韻論的・形態論的特徴をふまえて説明している。

〈第3章 音韻篇：契丹語の音韻体系〉は、契丹小字文献を資料として契丹語の音韻体系を再構し、その歴史言語学的位置づけを論じたものである。第1節は母音について論じており、第2章で論じた漢語原音との対応や契丹小字の綴字規則の特徴に加え、異形態の分析を通じて契丹語の長母音が「開口性」「硬口蓋音性」「唇音性」「咽頭音性」の4種類の音韻素性から区別される（少なくとも）11種類の母音音素（aa、 ää、 aa、 ee、 oo、 öö、 øø、 υυ、 uu、 üü、 ii）を有することが明らかにされている。一方、短母音については、硬口蓋化と呼ぶ形態音韻現象の存在や契丹小字の表記特徴から、開口性を欠く3種類の素性のみによって区別される8種類の母音音素（a、 e、 a、 i、 o、 ö、 u、 ü）しか有しないことが推定されている。このように契丹語の共時的母音体系が明らかにされた上で、同系言語であるモンゴル諸語との比較研究によって通時的特徴が分析される。母音の長さに関しては中期モンゴル語の母音連続（現代モンゴル語の重母音）に対して契丹語の重母音が対応するほか、中期モンゴル語の単音節語幹のうち開音節であるか或いは非阻害音を末子音とする閉音節である語幹の単母音に対しては契丹語の長母音が対応し、中期モンゴル語の多音節語幹または阻害音を末子音とする単音節語幹の単母音に対しては契丹語の短母音が対応するという規則が明らかにされ、長母音・短母音それぞれの場合の具体的な音対応規則と祖形が帰納されている。それによれば、共通祖語からの分岐後に契丹語の初頭音節において短

母音**u*と**ə*の*u*への合流と短母音**i*と**o*の*i*への合流という2つの音変化が生じたことが推定される。そのほか、硬口蓋化および咽頭化という2つの同化が生じたことも推定されている。

第2節は子音について論じており、漢語借用語表記や漢字音写資料、形態音素的交替、さらに同源語における音対応等を材料として契丹語の子音音素の音価が推定されている。それによれば、契丹語の子音は主調音器官として舌頂・前舌・舌背および唇の4類を用い、このうち舌背についてはさらに唇化／非唇化と咽頭化／非咽頭化の対立を有する。子音音素としては強阻害音*t*、*s*、*č*、*š*、*k*、*χ*、*χʷ*、*p*；弱阻害音*d*、*z*、*j*、*ž*、*g*、*gʷ*、*ɣ*、*ɣʷ*、*b*；共鳴音（鼻音・側面音を除く）*r*、*y*、*ǰ*、*ǰʷ*、*w*と鼻音*n*、*ñ*、*ŋ*、*m*および側面音*l*、*l*が再構される。比較言語学的には、中期モンゴル語の語中の強阻害音が契丹語の弱阻害音に対応し、中期モンゴル語の母音間の弱阻害音（*z*、*ž*を除く）が契丹語の共鳴音に対応することが明らかにされ、共通祖語からの分岐後に契丹語において語中強阻害音の弱阻害音化（**t*、**s*、**č*、**š*、**k* > *d*、*z*、*j*、*ž*、*g*^(w)；*ɣ*^(w)）と母音間弱阻害音の共鳴音化（**d*、**j*、**g*、**b* > *r*、*y*、*ǰ*^(w)、*w*）という2種類の大規模な子音推移が生じたことが推定されている。

〈第4章 形態篇：契丹語形態論の基礎的研究〉では、契丹語の形態論に関わるいくつかの基礎的なトピックが扱われる。第1節では、名詞類の形態変化に関わる文法範疇として性・数・格が存在することが述べられ、それらの文法範疇がどのように標示されるかが記述される。まず性については、名詞・代名詞および空間詞ではそれ自身に形態的な標示はなく、形容詞と基数詞において形態変化が見られる。すなわち、一部の形容詞は接尾辞-*ñ*の附加により女性形を標示し、また一部の形容詞は硬口蓋化により女性形を標示する。男性形は形態上無標である場合が多い。一方、百未満の基数詞の性による形態変化は詳細が不明ながら、男性形が有標な形式を取り、女性形が形態上も無標である。ただし、一部の形容詞および百以上の基数詞は男女同形で、性の標示をもたない。数については、一部の代名詞を除いてすべて接尾辞の附加により複数形が標示される。その種類は-*d*、-*z*、-*j*、-*ñ*、-*ñəər*と多様であるが、これらの接尾辞は語幹に応じて相補分布する異形態であることが述べられる。格については、すべて接尾辞の附加によって標示され、主格-*Ø*、対格-*n/-ii/-Ø*、属格-*n/-ii*、与位格-*nd/-d/-əər*、奪格-*ndii/-dii/-əərii*、造格-*əər*の諸形式を取ることが整理されている。ここでは各格接尾辞の異形態の分布条件が記述されるが、中でも与位格・奪格接辞における異形態-*nd*、-*ndii*と-*d*、-*dii*の分布が検討され、歴史的に見て語幹末が子音*r*、*l*であったものが接辞-*d*、-*dii*を取り、それ以外の子音または母音であったものが接辞-*nd*、-*ndii*を取るという条件が明らかにされている。複数接辞に-*j*を用いる語幹も同様に語幹末がかつて子音*r*、*l*であったものである。

第2節では、動詞類の形態変化として活用語尾が一覧され、その中で形動詞語尾に見

られる異形態-*ǣr*/-*aar*/-*oor*と-*bær*、-*lær*と-*dǣlar*、-*lag*と-*dǣlag*、また副動詞語尾に見られる異形態-*y*と-*j*の分布条件がそれぞれ検討され、さらに動詞語幹拡張接尾辞に見られる異形態-*laǥ*/-*laǥ*-と-*aǥ*/-*aǥ*-の分布条件が検討される。論者はこれらの異形態の使い分けにおいてはいずれも、かつて語幹末が子音であったか母音であったかが重要な因子として働いていることを明らかにし、契丹語形態論における歴史的音韻条件の重要性を論じている。

〈第5章 対音篇：遼代漢語音の研究〉は、これまでの章とは趣を異にし、契丹語自体の解明ではなくて解明された契丹語資料を利用して遼朝内で使用された漢語音の再構を試みる発展的研究である。ただし、第2章や第3章で漢語借用語や漢字音写を利用しているように契丹語の研究においては漢語音が極めて重要な役割を果たしており、遼代漢語音の詳細な検討は単に応用研究という性格だけでなく、同時に契丹語・契丹文字の解読に確かな基盤を提供する基礎的研究の役目をも担うものである。

第1節では、遼代漢語音の研究材料と先行研究が概観される。研究材料としては契丹文字資料、契丹語漢字音写、韻文、別字・異文、梵漢対音、音註資料が検討されるが、この中で有効な資料として本研究では契丹文字資料のうち契丹小字文献中の漢語語彙を主要資料とする方針が取られ、補助的に契丹大字文献中の漢語語彙と契丹語漢字音写および遼代石刻文中の韻文が参照されることが述べられる。

第2節では、遼代漢語音を北方漢語音韻史の大きな流れの中で捉えるために、基準となる遼代前後の2つの時代の漢語音が概観される。遼代以前の漢語音としては慧琳『一切経音義』に反映される8世紀後半の唐代長安音が、遼代以後の漢語音としては卓從之『中州楽府音韻類編』に反映される元代北方音が選択され、それらの音韻体系が提示される。本節は本研究で使用される漢語音韻学用語の解説も兼ねており、また提示される音韻体系には従来の推定とは異なる論者独自の解釈も含まれている。

第3節は遼代漢語の声母について論じる。閉鎖音の発声タイプ（清濁）、常母・崇母、舌上音と正歯音の対立、唇牙喉音における硬口蓋化／非硬口蓋化の対立、軽唇音の阻害音、齒頭音、日母、微母、牙喉音の阻害音、娘母と泥母といったトピックが論じられ、最終的に声母全体の推定音が示される。

第4節は遼代漢語の韻母について論じる。はじめに一二等韻の合流と牙喉音開口二等韻の拗音化の問題が集中的に論じられ、先行研究の解釈とは異なり遼代漢語では牙喉音開口二等韻の拗音化が依然として生じていないことが主張される。次いで韻母各論として韻母グループごとにすべての韻母が検討され、最終的に韻母の推定音が示されて全体の音韻論的解釈が与えられる。本節と前節の2節で論者は、『慧琳音義』や『音韻類編』に留まらず、『皇極経世声音唱和図』や『説文解字繫伝』反切といった五代～宋代の音図・音註資料、日本・朝鮮・越南・チベット・コートン・ソグド・ウイグル等の各種対音資料、さらには現代諸方言といった各種資料を渉猟し、それら北方漢

語諸変種との比較を通して遼代漢語音の特徴を描き出している。

第5節は遼代漢語の声調について論じる。先行研究によって発見された去声特殊表記の再検討、新たな特殊表記の発見およびそれら2種類の特殊表記の分布と音声解釈に基づき、北方漢語における声調の分合や唐代声調に関する悉曇家の記述もふまえて、遼代漢語音の調類と調値が可能な限り推定されている。その知見に基づいて論者はさらに、契丹語の漢字音写において漢語去声字が契丹語重母音の音写に充てられる顕著な傾向が存在すること、また漢語陽調字が契丹語の初頭音節の音写に、陰調字が最終音節の音写に充てられる顕著な傾向が存在することを発見している。そして、そうした音写の様態に基づいて契丹語の音調パターンが推定されている。

第6節は本章のまとめであり、遼代漢語音について得られた知見が整理されている。

〈第6章 結論〉では本研究によって獲得された知見が整理された上で、今後の研究指針が確認される。

本論文には、本論を補足するための以下3種の附録が附随する。

〈押韻語総覧〉は、第2章第3節で論じた契丹小字文献中の韻文における押韻語を一覧したものである。

〈同源語総覧〉は、主として第3章および第4章で扱った、現在までに発見されているモンゴル諸語との同源語を一覧したものである。

〈契丹小字漢語表記総覧〉は、第5章で主要資料とした、契丹小字表記された漢語語彙の一覧である。

(論文審査の結果の要旨)

契丹語は、10世紀から12世紀にかけて現在の中国北東部からモンゴル高原までを支配した契丹人の言語で死語である。契丹語は、10世紀前半に契丹人自身が創製した契丹大字と契丹小字により表記された墓誌銘などの金石文、及び同時代の漢人が漢字音によって音写した契丹語の語彙の主に2種類の資料から研究されてきた。基礎語彙の比較によりモンゴル系の言語と同系であることは明らかで、それらとは早い時期に分岐したことが知られる。契丹文字は100年ほど前に発見され研究が始まった。資料が主に墓誌に限定され分量も多くないことから文字の解読は難航した。1970年代になって、中国の契丹文字研究小組が、表音文字である契丹小字で表記された漢語の比定をもとに多くの文字の大凡の音価の推定に成功し、解読に向けての道が拓かれた。しかし表意文字とされる契丹大字だけでなく、ある程度音価が知られるようになった契丹小字についても今なお不明な点を多く残しており、解読作業はまだ道半ばである。

本論文は契丹小字文献を主要資料とし契丹語の音韻論的・形態論的諸特徴および契丹小字の文字論的な特徴を明らかにし、さらに論者が解明した契丹語資料によって当時の遼代の漢語音を再構した労作である。全体は6章と附録から構成されている。

第1章は導入で、契丹人と契丹語・契丹文字について概説し、本論文で使用する契丹語および漢字音写資料を解説する。本章では漢字音写資料のうち石刻文献のような同時代資料と、後代に編纂され改変を蒙った可能性のある伝世文献を峻別すべきことを指摘していることは高く評価される。この種の方法論的な厳密さと慎重な研究態度が論文全体に見られることは、論者の卓越したデータ分析とそれを可能にしている関連知識の量と質と相俟って、本論文での議論の信頼度を高めている。

第2章では契丹小字の文字体系の基本的特徴の解明が試みられる。契丹小字では、字素と呼ばれる400個弱の表音記号をハングルのように組み合わせて語を表記するが、先行研究による字素の音価推定方法を概観し、暗黙裡に前提している仮定が妥当でないことを説得的に論じる。論者は字素間の接続特徴に着目し、母音を重ねて表記する際には必ず同じ音色の母音が使われるなど極めて厳密な綴字法が存在する事を発見し、それをもとに字素の正確な音価を推定できることを示している。その結果、契丹小字は類型論的には希な、母音+子音のような母音先行型の音節文字を主体にする文字体系であるという画期的な事実を明らかにできた。従来十分に注意が払われなかった契丹語韻文の押韻現象を解明し、網羅的に収集して論拠にしていることも注目される。このように契丹語資料内部の分布から音価を推定する方法に徹することで、漢字音写語では1音で表記されている音が、契丹語のr音と2種類の側面音とに対応することを発見できたが、これも厳密な方法論を適用したことによる副産物である。

第3章では契丹語の音韻体系の解明を試みている。第2章において契丹語の音素の種類はある程度推定できていたが、この章ではそれらがどのような音声素性によって区別され、どのような音素体系を構成していたのかが議論される。モンゴル語と同様

の咽頭化の有無を含む母音調和が存在したことを明らかにした上で、現存のモンゴル語との母音及び子音の音韻対応規則が提出される。従来モンゴル語と語彙の比較は行われていたが、このように厳密な音韻対応規則を提示できたのは論者が初めてである。これにより契丹語では、ゲルマン語のグリムの法則にも匹敵するような、祖語からの子音の大推移が起きていたことが明らかになった。なお論者は契丹語の長母音体系については別に単行論文を発表し、日本言語学会の論文賞を受賞している。

第4章では契丹語の形態論に関わるいくつかの基礎的なトピックが扱われる。契丹語に性の区別があることは知られていたが、論者は女性形が無標の男性形に接尾辞を添える以外に、母音の前舌化によっても派生されることを明らかにした。この章では他に名詞や動詞の活用語尾の異形態について論じ、本来これらの異形態は語幹の末尾の形式に依存していたが、現存の契丹語の時代にはその区別が失われてしまっていたことを、モンゴル系の言語との比較によって見事に明らかにしている。

第5章「遼代漢語の研究」は本論文の最大の章で、550頁ほどの博士論文のほぼ半分をこの章に当てている。単行の博士論文一本に匹敵する浩瀚な内容である。本章では論者が解明した契丹文字の正確な音価を基にして、その契丹文字表記から判明する当時の漢字音、契丹語の単語が同時代の漢文石刻文献にどう音写されているか、及び韻文の押韻を基礎データとして、10世紀遼の領内で行われていた漢語について、声母や韻母だけでなく声調まで論じる。唐代の中古漢語から元朝時代の近世漢語への大規模な変化の中間段階を反映する遼代の漢字音は、漢語の音韻史にとって極めて貴重な資料だが、論者の周到な整理によって初めて漢語音韻史上での体系的な位置づけが可能になったと言える。例えば牙喉音開口二等韻の拗音化の問題では、先行研究の解釈とは異なり遼代漢語では当該の拗音化が依然として生じていないことが指摘されている。本章でとりわけ注目されるのは声調を扱った部分で、漢語去声字が契丹語重母音の音写に充てられる顕著な傾向が存在すること、また漢語陽調字が契丹語の初頭音節の音写に、陰調字が最終音節の音写に充てられる顕著な傾向があることを発見している。そして、それに基づき契丹語の音調パターンまでも再建することができた。

結論にあたる第6章につづく附録には、契丹語の押韻語総覧、同源語総覧、契丹小字漢語表記総覧を添えている。これらは今後の研究の基礎データともなり重要である。

本論文はその野心的な題目にも拘わらず、契丹語の歴史全般を扱い得ていないことが悔やまれるが、それは論者自身も認識している学界全体の将来の課題である。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月24日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果合格と認めた。

なお本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当分の間当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。